

週刊高齢者住宅新聞

2016年(平成28年)

8月17日

新しい住まいの形 コミュニティづくり

～日本版CCRCを考える～



(株)コミュニティネット 高橋英與(たかはし・ひでよ)

第13回 高齢者の地方移住

1948年岩手県花巻市生まれ。コーポラティブハウスや有料老人ホームづくりを経て、2006年コミュニティネット代表取締役に就任。自立型高齢者住宅を中心とした団地・過疎地再生事業に携わり、現在は地方創生の最前線に立つ。主な著書に『コミュニティ革命「地域プロデューサー」が日本を変える』(彩流社)。

元気に90歳過ぎまでじきに暮らすか——今、独り身で元気なシニア層が自問し、「移住」を検討する動きが出始めている。私が設立発起人の1人となり副会長を務める生涯活躍のまち推進協議会の「生涯活躍のまち」が寄せられる。

東京脱出 年金で暮らす

ドが足りない。だから東京脱出を考えている。先日もこんな相談を団塊の世代の女性から受けた。夫とは別れ、2人の息子は独立。ローンは完済し一定の貯蓄もあり、趣味は旅行という。元気な60代後半こそ、「第2の自立の時」と考えて、不安は、子どもに迷惑をかけず、自分らしく最期まで生きられる終の楽しみ探しである。

「東京圏で介護難民13万人」というショッキンな数字が発表されたのは1年前。日本創成会議は首都圏から地方への移住を提唱した。国も地方移住のための施策に税金を投入し、自治体を応援している。私たちの「生

涯活躍のまち・移住促進センター」には、首都圏から地方に移り住みたいという相談が多いだけに10年後のことが心配。介護の人手は足りなくなるだろうし、病気になつても入院ベッドが足りない。だから東京脱出を考えている。先日もこんな相談を団塊の世代の女性から受けた。夫とは別れ、2人の息子は独立。ローンは完済し一定の貯蓄もあり、趣味は旅行という。元気な60代後半こそ、「第2の自立の時」と考えて、不安は、子どもに迷惑をかけず、自分らしく最期まで生きられる終の楽しみ探しである。

確実なニーズは、「今10ヵ月、一定のニーズがある」というのが

「東京圏で介護難民13万人」というショッキンな数字が発表されたのは1年前。日本創成会議は首都圏から地方への移住を提唱した。国も地方移住のための施策に税金を投入し、自治体を応援している。私たちの「生

涯活躍のまち・移住促進センターや、1人暮らし。子どももいない。都内に不動産を所有し、家賃収入もある。しかし「元気なうちに、東京を離れて移住したい。体内に迷惑をかけたくない」とおっしゃる。趣味は街道歩き、油絵などを。カルチャーセンターに通う。そのような暮らしをしながら、必要になったら介護を受け、最期を看取ってもらえる場所に移り住みたいという。寿命が長くなり、老いてからの個性的な暮らし方を一人ひとりが選ぶ時代になる。同時に、家族、夫婦、さらには墓といつた概念までが揺れ、一人ひとりが生き方を探る時代に入っている。